**〔解　　説〕**

天保九年（一八三八）大坂稲荷東の芝居初演。伊勢の古市を舞台にした夏狂言の代表作です。

**〔あらすじ〕**

福岡貢は武家の生まれですが、今は伊勢にきて御師（下級神職）となり、旧主今田万次郎が紛失した青江下坂の名刀を捜しています。刀は手に入れたものの、その折紙（鑑定書）が見つかりません。

古市の遊郭油屋のお紺は貢と相愛の仲ですが、客の徳島岩次が折紙を密かに懐中していることを知り、岩次に身をまかせると見せかけ、折紙を手に入れようとします。

お紺と岩次の盃事が始まりました。そこへ貢がやってきます。お紺の気持ちを知らない貢は激怒し、お紺からは別れ話を持ち出され、遣り手の万野からもなぶられ、油屋から追い出されてしまいます。一旦引き下がる貢ですが、その恨みから妖刀・青江下坂に取り憑かれたように、油屋の奥庭で次々と人に斬りつけてゆきます。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。　　　　　　　(一般社団法人　義太夫協会発行)

**古市油屋の段**

こそは立ち帰る。

後にお紺はうっとりと、しばし思案にくれ告ぐる、遠寺の鐘も身にしみて、ときつく胸の闇やゝあって顔を上げ、

「せっかく思ひ思はれて、二世と交した貢さん、のかねばならぬ浮世の義理。今伯母御様のお詞には、『許婚の榊さんと祝言をさゝねば、養子親への義理が立たぬ故、思ひ切ってくれ』と、事を分けてのお頼み、とは言へこれが何とまあ、一夜流れの仇夢も、別れは惜しき明けの鐘、炎の中に暮らそうか、あなたを退いて片時も浮世の日影が見られうか、むごいつれない胴欲な、別れと云ふ字を聞いてさへ胸にしみじみ悲しい」

と恨み涙にくれいたる。

「お紺さん〳〵〳〵はどこにぞ」

と云ひつゝ出て来る遣手の万野、見つけられじと文巻き取り、心もうわの空封じ、知らぬ万野は声高に、

「お紺さん〳〵ヲヽお紺さんそこにかいな、そんな事知らずに、一遍と尋ねましたわいな、イヤコレシコレお紺さんへ、モ今更言ふぢゃないが、この間からも勧めているアノ岩次さん、モ大体良いお客じゃないぞえ、それにお前も物好きな、いかに心中立てるとて、アノかす禰宜の貢づら、オホヽヽヽお紺さん、堪忍しておくんなはや、ハヽヽヽ。モ今もいまとてお鹿さんが、貢さんから度々の無心状、誠かと思ふて身の皮はいで打ち込んだが、モウ悔しいと私への懺悔、コレシコレこの文を見やしゃんせ、アノ口先でちょぼくさと、古市中の女郎の油をねづり廻る油虫、モその油虫の事はとんと思ひ切り、岩次さんになびかんすりゃお前も出世、コレシコレお紺さんへ、この万野は悪い事は勧めませぬぞへ、モヽヽヽふっつりと思ひ切らしゃんせ」

とたきつけかける詞のわら、それとは知れど、真顔に受け、

「ヲヽ成程、この状の様子では、興の覚めた貢さん、そんならお前の言わしゃんす通り、岩次さんに乗り替へうわいな」

「エヽアノお紺さん、そんならお前はん、ほんまに岩さんに乗り替へる気かへ」

「何の嘘を言ふものかいな」

「お紺さん、アヽ好きやヨヤ〳〵よ、ホヽヽヽ、コリャコレ、近年の大出来ぢゃわいなお紺さん、アヽよさやヨヤ〳〵よ、ホヽヽヽ、そんならすぐに奥へ行て、改めて固めの盃、サア〳〵おいで」

と無理やりに、引っ立てられて詮方も涙隠して入りにけり。かくとは知らず、うと〳〵と、恋には心引かれ来る、身の災難に福岡貢、とやかく案じたゝずみける。

「ムヽあの唄は、油屋の二階座敷、阿波の客が居続け騒ぎ、テモマ面白さうに唄いおるな、それに引替え心ならぬは万次郎様のお身の上、今宵につづまる御身の難儀、お紺に頼んだ折紙の詮議、今に何の返事も無いは、コリャ岩次の手に無いのか知らん、マア何にもせよ、お紺にちょっと逢ひたい」

と見廻す内より出て来る喜助、出会ひ頭に、

「ヤア若旦那さん」

「ヲヽ喜助か、ヤ幸ひ〳〵、どうぞ首尾してお紺に一寸逢わしてたも」

「ヘイ、かしこまりました」

と奥口見廻し、

「イヤ申し若旦那さん、はばかりながら一寸あれへ」

「喜助、わしにか」

「ヘイ」

「何の用じゃ」

「モ、今改めて申上げまするは如何なれ共、いつぞやお国の騒動より、この伊勢路へお引越しなされまして、あなた様には福岡へ御養子、それ故親共も奉公引いて、この古市にてわづかな暮らし、そののち大病を患ひ、今際の枕元へ私を呼び、アノ福岡孫太夫様の御養子貢様は、我々親子が古主の若旦那様、随分共に心をつけて、忠義を尽くせ、と親共が遺言でござります」

「ムヽ、スリャそちは喜兵衛が伜であったよな。さすれば我が為にも家来同然、古主を忘れぬそちが意見、悪うは受けぬ、忝い、がマア、それは格別、コリャコレ、大切な一腰、わしが持っていては人目に立つ、帰る迄預かってたも」

「ヘイ、私がしっかりとお預り申しました」

「アヽコレ、その一腰は、青江下坂」

「エヽそんならこれが」

「いかにも、刀は手に入れども、これについたる折紙を騙られ、モ色々と詮議をすれ共、今において行き方知れず、何とぞ折紙を取り返さんと、毎夜ここへ入り込むも、もしや詮議の手掛かりも有らふかと、心を砕く某、アゝコレ、必ず他言は無用ぢゃぞや」

「ヤコレハ〳〵左様とも存ぜず、慮外の段は真平御容赦、シテその折紙を騙った奴が、この油屋の内に」

「サ、確かにそれとは知らね共、もしやと思ふはアノ奥の、アコレ喜助、一寸耳を貸しゃ」

「ヘイ、エ、そんならアノ岩次が」

「アヽコレシイ、秘かに〳〵、何かは奥の大騒ぎに」

「首尾を作るは最究竟」

「そんなら喜助」

「若旦那さん、サアかうおいで、なされませ」

と先に立つ、案内につれて福岡貢、のれんの奥へ入りにけり。こなたの障子引明けて、伺い出でたる徳島岩次、何か心に打ちうなづき、差し足抜き足のれんの内、忍び入って二腰の刀をそっと後先見廻し、おのが刀と貢が刀、手早に目釘コッチコチ、身をすり替へる即座の悪知恵、のれんの影より伺う喜助、それと白刃の二腰を、元の如くに差納め、又も納戸へ持って入る。お紺はすごす無理酒の酔ひに心も乱れ足、

「岩次さん〳〵」

と呼び立てられて、出て来る岩次、

「ヲゝ岩さんとした事が、座敷をはづしてお前はどこへ」

「アヽイヤ、一寸手水に」

「アノマア嘘ばっかり」

「エヽ何の嘘を言ふてよいものか、証拠人は、北六、万野、ソレ、用意よくば早これへ」

と云ふ内奥に声高砂

〽相に相生の松こそ目出度かりけれ

北六万野が取り〳〵に、とさん盃硯蓋、名々にたづさへて、

「サア〳〵申しお紺さん、岩次さんへの固めの盃、色直しはすぐに床入り」

「サア〳〵媒介役はこの北六、嫁君から呑んで差し給へ」

と無理に突きつけつぎかくれば、堪へかねて駈け出る貢、お紺が盃引ったくり落花微塵と投げつけたり。

「ヤイお紺、おのりゃこの盃しては済むまい〳〵ぞよ」

「ムヽ、誰かと思へば貢さん、お客と盃するがどうして済まぬへ」

「イヤサ、一通りの盃なら格別、この盃斗りさす事は、ならぬわい、コリャお紺、おのりゃこれ迄言ひ交わした事皆忘れたな、モ最前から見ていれば、ほてくろしい座敷ぶり、エヽも了見が」

と立ちかかるを、岩次は引きのけ、

「ヤイ〳〵〳〵かす禰宜の大馬鹿者め、身が揚げ詰めの女郎に指でもささば、ほでも、すねも、ぶち折るぞよ」

と云ふに万野がしゃしゃり出で、

「コレシコレ貢さん、お前はんはマアこちの内へ、誰が許してござんしたへ、お前の様な油虫はな、顔見るのも胸が悪いアイ、起縁が悪い、サア〳〵〳〵〳〵とっとと去んで貰ひましょ」

とずっかり言われて、尚せき立ち、

「コリャ万野、わりゃマア味な事云ふな、この貢が女郎の油をいつ吸ふた事が有る、サア〳〵〳〵〳〵、それ聞こう〳〵」

「ヲゝアノマア白々しい顔わいな、ヤコレシコレお紺さんへ、最前の文、見せてやらんせ」

と云ふにお紺が懐より、取出し渡す以前の文、いち〳〵貢が見てびっくり、

「ヤコリャおれが名を騙って、女郎のお鹿へ無心の状」

「何と覚えがあらふがな」

「イヤ、知らぬ、元より訳ある仲じゃなし、こんな文やった覚へはない、あた汚いあのお鹿、風俗と云ひ顔と云ひ、しっかい猿芝居のお染、余り呆れて物が云はれぬ」

と悪口聞いて、駈け出るお鹿、貢が前に台臼なり、

「コレシコレ貢さん、最前から聞いていれば、お前さん余りじゃぞへ〳〵、アイ、私やどうでお紺さんの様に美しうはない、〳〵けれど、顔でお客は取らぬぞへ、コレ、肝心の時にはな、ぐったり堪能さすによって、ついに一日お茶ひいた事はござんせぬ、お前もそれを見込みに、アノ万野さんを頼んでつけ文、その度々に、アヽコレ〳〵見なされ、この通りにな、二歩一寸お貸し、アヽソレ又、この状に三歩貸せ、エヽまだここにある、ソレ見なされ、又一両いるのと、モ親にも聞かぬ無心をば、五度や十度の事かいな」

「エヽ何を」

「それに今更知らぬとは、ソリャお前卑怯じゃ〳〵〳〵わいな、筆先でたらし込み、身の皮はいだ生盗人、エヽ腹の立つ〳〵」

と、言ひつつ両手に胸づくし、引っつかむ手をもぎ放し、

「エヽ様々のたわ言、身不肖なれども福岡貢、そちらに無心言ふ様なおれじゃないわい、コリャお紺、これには何ぞ訳が有らふ、訳を言へ、どふじゃ〳〵ヤイ」

「ヲヽ、お前の内証の文が私の手に入り、腹の立つはコリャ尤もでござんす、ガ申し貢さん、お前と私が仲は、人も知った、サ仲ぢゃぞへ、モウまい〳〵〳〵、まいつかずと、早ふ去んで下さんせ」

と口には言へど心には、『ヲヽ道理でござんす道理ぢゃ』と、言ふに言われぬこの場の仕儀、血を吐く思ひ押し隠す。知らぬ貢は腹立ち涙、傍に北六高笑ひ、

「ハヽヽヽコリャをかしいわい、客が女郎の物騙して取るとは、こいつは新しいわい、コリャ新版じゃわい、ハヽヽヽヽこれが本の伊勢乞食じゃ〳〵」

何がな当たる憎て口、岩次も片頬にせせら笑ひ、

「アヽイヤモ聞けば聞く程馬鹿な詮索だわい、お紺が心底聞く上は、今夜中に身請して身が女房、ドレ、金の威光を見せうわい」

とお紺がひざを仮枕、すねふん反らす傍若無人、見るに貢は歯ぎしみ歯切り、

「チエヽ見違うた、アノここな、どふ畜生、その根性とは知らず、大事を明かしたが、エヽ無念なわい、とは云へおのれに限ってよもやその様な根性とは知らなんだ、エヽ知らなんだわい」

と、にらむ眼にはら〳〵涙、お紺が胸はなほ百倍、破裂く斗りのせ苦しさ、涙まぎらす煙草さへ、炎にむせる思ひなり。納戸に始終立聞く喜助、刀を持って走り出で、

「貢様、モウお帰りなされませ、悪い事は申しませぬ〳〵、サ、お預り申したお腰の物」

と差出す刀、ひったくり、腰に差す間も気はしゅらくら、刀の違ひに目もつかず、万野は傍へ立寄って、

「コレシコレ貢さん、お前はんはもうそれでしゃべり仕舞ひかへ、ヲヽ気の毒やの、コレシコレ貢さん、一寸こちらへおいなんせ、サア〳〵〳〵早ういなんせ、エヽ、早うおいなんせと言ふに、ヤナニ貢さんエ、最前から段々の失礼、サヽヽヽお腹が立とう、ヲヽご尤もでござんす〳〵〳〵、が、私に免じてどふぞ、堪忍して上げておくんなんせ、コレシコレ貢さん、なんぼお前がやき〳〵〳〵やき〳〵〳〵思はんしてもソレ、ぜぜの切れ目が縁の切れ目じゃわいな、アノお紺さんを恨みなさるる事は微塵も無いぞへ、お前のその素寒貧を恨まんせ、モ本に〳〵お前の様な貧乏神、片時置くも内の不吉、サア〳〵〳〵とっととお帰り〳〵〳〵、アイよふおいなはったエ、エ何、煙草入れお忘れたのかエ、ドレ〳〵私が取って来てあげませう〳〵、サ煙草入れ、持ってお帰り、エヽまだ他にお忘れ物、ナニお羽織、ホヽヽヽこれは私も気が付きませんでした〳〵、ドレ〳〵、ソレお羽織。お帰り、去にんかい、去になはらんかいな、エヽ去にやがれ」

と突き出す門口、こらへかねて刀の柄、手はかけながら忠孝の、二字に引かれて喰ひしばる、

「チエヽゝうぬ」

「ナヽヽ何じゃエ〳〵、歯をむき出し、草莱子をひねくって、アヽ何かエ、コリャ私を切る気かへ、面白い〳〵、サア〳〵切られましょ〳〵。手てから切るかエ、首から切るかエ、おいどから切るかエ、サア早うお切り〳〵、切りなんせ」

「コリャ万野、おのれはな」

「何じゃエ、サア早うお切り、サアお切り〳〵、エヽどっから切るのじゃ、貢さん」

「ムヽ、エヽ勝手にさらせ」

と道をけたてゝ立ち帰る。岩次は後に声ひそめ、

「コリャ万野、身が刀を早これへ」

と言ふに心得のれんの内、刀かゝへて走り出で、渡すを取って打ち眺め、

「ヨウ、コリャコレ身が刀ではない」

「エヽそんなら貢が取違へて去んだに違ひはない」

と言ふに北六勇み出で、

「何だ貢が刀を取違へて去んだとは、天の与へ〳〵〳〵、これこそ望む青江下坂」

「アヽイヤ〳〵それが大間違ひだわい、最前秘かに貢が刀と身が刀、中身をすりかへ置いたに、取違へて去にをったが本の下坂」

「エヽどんな、私が一寸一走り」

「アヽイヤ申し、そのお使ひは私が参りませう」

と言ひつゝ納戸を出る喜助、

「ヲヽ喜助か、よく気がついた、貢に追付き腰の物を取り替へて来い、サ早う〳〵」

と手に渡せば、

「まっかせ合点」

と、駈けり行く。万野はにわかに心付き、

「コレ〳〵申し岩次さん、お前はマアめっそうなお方じゃわいな、アノ喜助はな、確か、貢が譜代の家来じゃといな」

と聞くより岩次は興醒め顔、

「サア〳〵〳〵壺じゃ〳〵」

「岩次さん、壺とは何壺じゃへ、水壺かへ、塩壺かへ、但しは子壺かへ」

「ヤアコリャ〳〵万野、あわてな〳〵、と言ふて身共もあわてておるわい。コリャ〳〵万野、そちは喜助に追付き刀を取り、貢が刀と替へて来い」

「ハイ〳〵〳〵、心得ました、貢に逢ふて刀をたくり、きっとお渡し申しませう、ドリャ一走り」

と身づくろい、褄引上げて、

「ヲヽイ喜助どん〳〵」

と声は先、体は後に心も空、足を早めて、

「ハ、ハア、アヽしんど〳〵一寸待って喜助どん、〳〵、ヲヽイ喜助どん」

と走り行く。岩次は後を見送って、

「万野が戻って来る迄は、皆を相手に二階で飲もう、サア〳〵こちへ」

と打ち連れて、二階へ

**貢十人斬りの段**

こそは行く後へまた引返す福岡貫。取違へたる脇差の、身は正真の下坂とも知らず、知らねば気もそぞろ、門の戸引明けうちに入り、

「誰もゐぬか、コリヤ喜助々々、万野、万野はおらぬか、エエをらぬか」

と見廻す折しも、遺り手の万野、息もすたすた立戻り、顔見合はせて、

「ヤア貢さん、アヽしんど、アヽ疲れた、貢さんお前もいかにあはてるてて、腰の物を取違へるといふやうな、麁相なことがあるものかいな。その刀こつちへ」

と、取りにかかるを、突放し、

「イヤ身が刀から先へ渡せ」

「エヽマア渡さぬとて取らずにおかうか。エヽこの刀」

と、取りにかかるを続けざま、打てばぱつしり鞘割れて、思はず知らずひと刀。

「アヽちめた〳〵。ヲヽ貢さん。お前はん切りなはつたなア、アレ〳〵」

と泣き叫ぶ。声立てさせじと口に手を当て、見れば血汐に身は紅

「ヨウヤヽヽヽ、南無三、手が廻つたか。モウ百年目」

とまたずつかり。切られながらに逃げ行くを、轡つかんで引戻し、肋骨をぐつとひとゑぐり、そのまま息は絶え果てたり。折しも奥より北六、岩次、あとにつづいて出て来るお鹿、

「岩次さん〳〵。北六さん〳〵」

と尋ねる向ふに立塞がる。

「ヤア貫さん。アレ人殺しぢや、アレアレ」

といふ声に、

「コリヤさせぬわ」

と北六、岩次、留めにかかるを身をかはし、左へ廻る北六を、肩先下りに切りつくれば、

「コリヤ叶はぬ」

と気転の岩次、奧庭さして遁れ行く。お鹿は足も地につかず、こけつ転びつ這ひ廻る。

「おのれお鹿」

といふ声に、思はず知らず立上り、逃げ行く後ろを遁さじと、躍り上つて唐竹割。物音聞きつけ勝手より、起番男、仲居、下女、

「もの騒がしきはなにごと」

と、差出す伸居が手燭の光、ふり向く拍子貢が顔、見るより三人足わな〳〵

「ヤレ人殺し、〳〵〳〵

といふ間も待たず左より、右の腕を切り落す。『うん』と仲居が即死のありさま、見る両人がうろたへ廻り、奥と表へ逃げ行く男、『外へ出でなば面倒』と、声をもかけず後袈裟。返す刀に下女が首、水もたまらず切り落す。音も分ちぬ寝とぼけの、小女郎が出る足元に、血にすべつて、ばったりと、こける拍子にお鹿が傍、

「ヲヽこのやうなところに水を流してヲヽちめた。ヲヽここに寝てぢやは誰ぢやいなア。コレ起きんかいな〳〵」

と、いひつゝ立寄り見てびっくり、

「アレ鹿さんが切られてぢや。アレ〳〵」

といふ間もなく片足、ちようど切り放せば、片足たちに、ひいふうみい、よろ〳〵〳〵と、鉢前の手水鉢に取りついてそのまま、息は絶え果てし、無惨といふも余りあり。

「サアこの上は岩次一人。取り遁しては刀のありか、このひと間こそ、ムそれ」

とうかがふうちより泊り客

「アア一ぱい機嫌にぐつたりと寝てのけた、酔ひ覚めの水の心地や朝桜ハヽヽヽヽヲヽコリヤ灯が消えてあるわい」

といひつつ出づる廊下口、うかかふ貢が刃の光、

「コリヤ堪らぬ」

と逃げ行く庭先、逃ぐる人影岩次と心得、追ふて行く。寝間よ出づる、相方女郎、貢を客と心得て、

「もうしこの人さんわいな。どこへ行きなんす。もうしそちらは前裁ざますよ、落ちなんすなえ。危なうござますよ。水ざいますか。コレシコレ水はこちらにあるわいな」

としごきも脇へ、しどもなき、裾もほらほら、追ひ行く女郎。振返りて拝み打ち、客ははふ〳〵樹木の蔭に、息を詰めてぞかがみゐる。『コハ心得ず』と燈籠の影に透して、

「確かに岩次ござんなれ」

と、襟髪つかみ引出し土に差付けにじり付げ、

「サア下坂の刀はいづくへやりしぞ。まつすぐに自状びろげ」

と、ひしぎつけれ、

「アヽもうし私はなんにも知りませぬ」

「ヤアいまになつて知らぬとは卑怯至極。いはぬとていはさいでおかうか」

といふうちに来る人音に『南無三』と、ためらふ隙にはね返し、逃げ行く、後を横なぐり、すぐに立寄り顔見れば、

「ヤアコリヤ岩次ではなし、チエヽ取逃がせしか残念」

と拳を握りゐたりける。お紺は驚き心も空、こけつ転びつ走り寄り、

「貢さん」

「ヤアお紺か。覚梧いたせ」

と突きかける。

「マア〳〵待つて下さんせいな。サア〳〵腹の立つはもつともなれど、これにはだん〳〵訳のあること」

「ヤアなんの訳のこと」

と、また振り上ぐる刀の下

「コレイナア、マア気をしづめてとつくりと、しれ見て疑ひ晴らして」

と、投げ出す包、手に取上げ、

「ヤアコリヤコレ折紙。ムヽそれなら宵のつれなきは」

「サイナアお前に忠義が立てさせたさ。どうやらかうやら岩次をだまし、首尾やう手に入るこの折紙」

と、いふに貢は

「ハヽア」

いまさらに後悔、涙の折からに、喜助は心ならざれば、『もしや』と思ひ立戻る

「喜助か」

「フウ若旦那、シテこのありさまは」

「どうも堪忍はならぬゆゑ、喜助赦してくれい」

と、刀の柄に手をかくれば、その手を押さへて、

「コリャ狼狽へてなんとなされます」。

「ヲヽ狼狽へた、最前そちに預けた刀」

「サアそれはそこに持つてござるのが本の下坂」

「ヨウそんならこれが、エヽありがたや〳〵な」

「サアもうし二色ともに揃ふ上は、一時もはやう万次郎さまへ、早々お渡しなされませ」

「喜助、お紺。だん〳〵の心遣ひなんにもいはぬ、添い。シテこの場の首尾は」

「ヘイ私が呑み込みました。跡構はずと万次郎様へ」

「ムヽ、しからば喜助、あとを頼む」

といひ捨てて、立ち出でんとするところへ、小蔭をぬつと徳島岩次

「ヤアどこへ〳〵。大事の刀こつちへ渡せ」

と、打つてかかれば身をかはし、

「シヤよいところへ徳島岩次。おのれを方々尋ねしに、ここへ出でたは百年目」

と、打つてかかれば切り払ひ切り結び、すきを見合はせひと刀。『うん』と倒るを、のつかかり、

「恨みの刀受取れ」

と、刺しとほされて七転八倒。心地よくこそ見えにけり。そばにお紺は心せき、

「夏の夜なればはや明け方。少しもはやうその刀を」

「ヲヽいふにや及ぶ。忠義を立つるも二人の情け」

と、心も勇む足勇む、忠義に心勇み立ち、屋敷をさして急ぎ行く。